

2006年の「ペコちゃんの森」

2006年の冬は、全国各地が豪雪に見舞われましたが、ペコちゃんの森も例外ではありませんでした。

2月の調査の際も積雪は依然70cmほどあり、記念碑もすっきりと雪に覆われていました。それでも相変わらず動物達は元気なようで、ウサギ・キツネ・シカの足跡を見つけることができました。



【埋もれた記念碑】



【水路の氷柱(ツララ)】

森で見つけた冬の風景を紹介します。水路で見つけた小さな氷柱(ツララ)です。笹を巻き込みながらできた氷柱は、どことなく風情を感じさせる佇まいです。

氷柱は、雪が少しずつ溶け出し、その雪解け水が下に落ちながら凍っていき事出来上がるので、「雪が解ける温度」と「水が凍る温度」が共存して、なければなりません。

そして木の上に取り残された雪のかたまりです。

一見、人工的な風景のようですが、枝付きや日光や風などの条件が重なってできた自然の風景です。

そして木の熱によって溶け出した雪です。木の周囲が空洞になっています。



【取り残された雪】



切り出した木を積んでいる場所でも同じような現象が見られました。

以前はすっきりと雪に覆われていましたが、木の切り口が姿を現しました。

これらの現象は、木が発する熱や木の持つ温度を伝えにくい性質が影響しているのではないかと考えられます。

雪景色の森を遠くから見てみると、ただただ「寒さ」だけを感じてしまいますが、近くでよく観察してみると、森の中にも「微気候」があることに気付かれます。

自然はその微妙な変化を敏感にキャッチして、様々な形で表現しているんですね。

5月になると森はすっかり春らしい姿に変わっていました。シンボルツリーのサワグルミも新しい若芽を芽吹かせています。

昨年ササが茂っていた地点でもササの若葉の姿が見られますが、昨夏の刈り取りの成果で生い茂る気配はありません。

しかし完全に駆逐するためには今年も同じ地域を刈り取らなければなりません。若々しく美しい緑、小さく可憐な花を咲かせる野草に囲まれた森は、見る者の心を清々しくさせてくれました。



【青空と新緑】



【サワグルミ】



【コリンソウ】



【タチツボスミシ】



【シロバナエンレイソウ】



【ショウジョウバカマ】

梅雨の季節になると、草花や木々の葉は雨水を受けて一層きらきらと輝いていました。

雨は美しいばかりでなく、葉から幹を伝い地面吸収され、やがて私たち人間になくてはならない「命の水」になることを忘れてはいけません。

雨上がりの森を探索していると、森は空からの水を最初に受け止め「命の水」に変える役割を果たしながら、更に多くの動植物の命を育んでいることを実感しました。



【サワグルミ全景】



【ククルマバナの花】



【艶やかなササの葉】

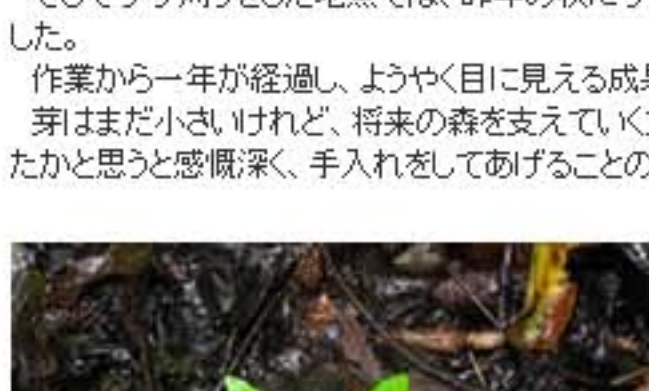


【ツタウルシの若葉】

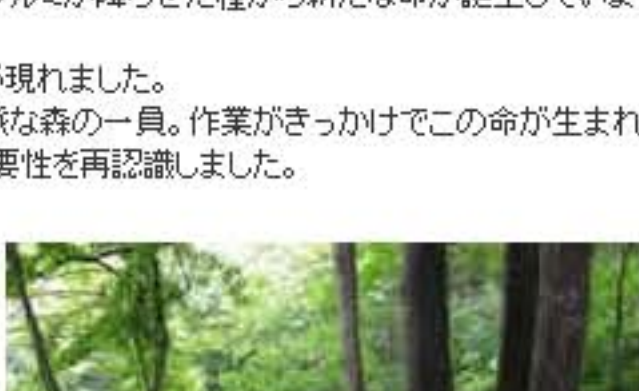
そしてササ刈りした地点では、昨年の秋にサワグルミが降らせた種から新たな命が誕生していました。

作業から一年が経過し、ようやく目に見える成果が現れました。

芽はまだ小さいけれど、将来の森を支えていく立派な森の一員。作業がきっかけでこの命が生まれたかと思うと感慨深く、手入れをしてあげることの重要性を再認識しました。



【サワグルミ稚樹】



【たくさんのサワグルミ稚樹】

秋の森は様々な種類の落ち葉で一面が覆われていて、名前を付けるならば「落ち葉の森」という表現がふさわしいです。



【落ち葉の絨毯】



【木の間から覗いた落ち葉の絨毯】

すっかり葉を落としたシンボルツリー・サワグルミも落ち葉の絨毯の中に一際大きくそびえ立っていました。



【サワグルミ】

落ち葉の下では、リスなどの小動物が冬に備えて食料の備蓄に忙しく働いているのでは?と想像を膨らませましたが、初冬の森の空気はピンとまりつめていて、落ち葉が物音を吸収しているかのよう静まりかえっています。



【リスの食痕】



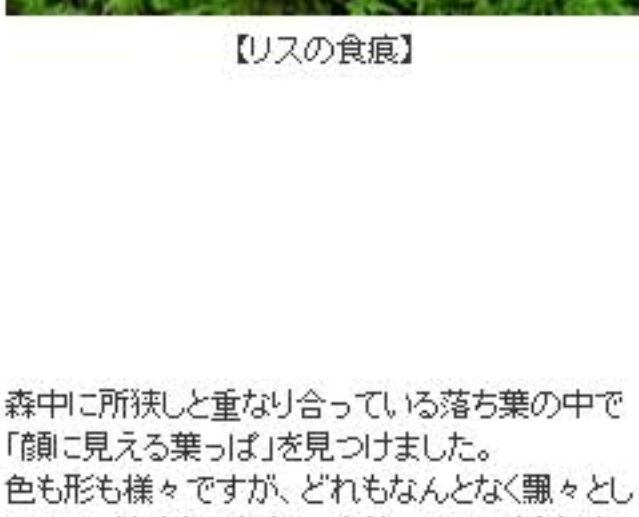
【顔に見える落ち葉1】

森中に所狭しと重なり合っている落ち葉の中で「顔に見える葉っぱ」を見つけました。色も形も様々ですが、どれもなんとなく顔々としていて、迫り来る冬をじっと待っているような表情に見えませんか?なんだか哀愁を感じずにはいられません。

これらを見つけた後は、葉っぱの絨毯の上で足を前に踏み出すことをちょっとためらうようになりました。



【顔に見える落ち葉2】



この日の黒姫山の頂上ですでに雪をかぶっていました。次に森を訪れる頃には「雪の森」に変化していることでしょう。

冬がもうすぐここまで来ている森からの便りでした。